

ローマ世界のねじれ現象

教師と医師の実態をめぐって

小林 雅 夫

はじめに

August Buck は彼の著書『ヒューマニズム』の中で、「ローマ人は二重の意味で“最初のヒューマニスト”とみなすことができる。ローマ人はヒューマニズムに特徴的なギリシア精神を創造的に受容するとともに、“Humanitas”なる語を生み出した」⁽¹⁾と述べて、ローマ世界の意義を強調した。さらに彼によれば、この用語はさまざまな意味を持つが、ヘレニズム化が浸透した地中海諸民族の中でも、ローマ人だけがギリシア文化の受容の過程で新しい独自の文化を創造し、ギリシア的教養の理想にそれ以後のヨーロッパに最も強い影響力を及ぼした形式を与えた。それゆえ、ヨーロッパ・ヒューマニズムは、ローマを媒介として古代への接近を果たしたことになる。つまり、ヒューマニズムはローマを媒介として古代ギリシアに接近することになるが故に、ローマ・ヒューマニズムを生み出したローマ世界の歴史的意味が問われるのである。

前述のように、ヒューマニズムはローマ世界で成立した。そして「最初のヒューマニスト」と呼ばれるローマ人は、ギリシア文明から多くのものを継承しながらも、ギリシア世界とローマ世界とは異なる点も多い。とりわけ目立ったことはローマ世界における教師と医師の社会的地位であろう。ある意味ではローマ・ヒューマニズムの担い手でもあったと解釈できるローマ社会の教師や医師たちの社会的地位は、一部の例外を除けば決して高いものではなかった。ローマでは、自由学芸を学び、ギリシア人医師たちから病気の治療を受けていた人々の多くがローマ市民であったのに対し、実際に教育や医療に従事していた人々の多くは出自の卑しい人々であり、彼らの多くは奴隷 (servi) あるいは被解放自由人 (liberti) であり、生来自由人 (ingenui) の教師や医師は稀であった⁽²⁾。この教師や医師の実態は、ギリシア世界とローマ世界では大きく異なっ

ており、この「ねじれ現象」は、ローマ世界の顕著な特色となっている。

仮にローマ社会では、出自の卑しい人々の教師や医師が誕生する可能性があった社会的事情が説明されたにしても、疑問が消えるわけではないだろう。なぜローマ人は自ら教師や医師になろうとしなかったのか。ローマ人が教師や医師になるだけの能力を欠いていたとは信じがたい。かれらがその分野での能力に劣っていたとの見解は、人種的偏見以外の何ものでもないだろうから。本稿では、この「ねじれ」に類似したローマ世界の特色を少し考えてみたい。

1 . ローマ・ヒューマニズムの成立

ヒューマニズムの起源は、古典ギリシアに、更にホメロスに代表される英雄時代にまで遡る。ヒューマニズムが意味する「人間らしい人間」の理想を当時の英雄像にみるとすれば、英雄とは文武に優れた人物であり、肉体と精神の一体化が前提条件となる。英雄とは知力・体力・風格に優れている人物であり、人間の理想像であった。「人間らしい人間」になるための条件は、体育と音楽の重視であり、音楽は情操教育と知育教育に結びつく。「人間らしい人間」になるのに必要な教養とは、具体的には後の自由学芸 (artes liberales) に結実する教育によって獲得されるものである。

教養教育の中核を形成する「自由学芸」とは、「自由人が学ぶにふさわしい学芸」の意味であり、「自由人」とは前5世紀のギリシアの自由市民にほかならない。それゆえ、自由学芸教育の対象者から当然ながら奴隷は除かれていた。また、ヒポクラテス医学に代表されるように、ギリシアにおいては医学は自由市民の独占分野であり、原則としてギリシアには自由市民の患者の治療を前提とする奴隷医師は存在せず、それに対してローマでは、奴隷医師の活躍を無視しては、ローマの医療を想像できない⁽³⁾。

ところで、現代の大学の起源は中世の大学にあり、そのために、現代のわれわれによく知られている中世の7自由科 (septem artes liberales) とは、文法学・修辞学・論理学あるいは弁証法の3学科 (Trivium) と数論・幾何学・音楽・天文学の4学科 (Quadrivium) である。そして、この中世の7自由科の起源は古代にある⁽⁴⁾。中世の7学科を規定したとみなされる後5世紀の Martianus Capella の著作『文献学とメルクリウスの結婚』は、古代ローマ末期の教育を反映したものであり、さらにこの Capella が手本としたのは Varro の散逸した

著作であった。そして Varro もまたヘレニズム世界に普及していた教育体系を受入れたにすぎず、その教育プログラムはそれ以前に形成されたものであったろう。

このことは古代から中世まで一つの教育体系が連続して支配したことを意味しており、個々の学芸を関連づけている思想あるいは artes liberales の根底にある思想が一貫していたことを意味している。そして、この自由学芸の根底にある思想は、古代ローマを越えて古典期アテナイにまで溯る。そして、この教育観は、前5・4世紀のギリシアにおける「学ぶだけの余暇をもった自由市民たち」の教養の理想に起源がある。つまりこの観念は、前450年から前350年までの「教育の世紀」の産物である⁽⁵⁾。

2. ローマ世界の教師と医師

ローマ人の精神に奉仕した教師たちとローマ人の身体に奉仕していた医師たちの活躍は、ローマ人の生命観、人間観にも大きな影響を与えていたと想像される。人間の心身に深く関与した教師と医師の仕事は、現代のわれわれにはかなり異なっているように思えるが、古代ローマでは、教師と医師とはしばしば類似した人々とみられ、社会的に似たような扱いを受けていた。教師と医師とはしばしば文献上でもひとまとめに言及されているが、ローマ世界の教師と医師とは共通している面も多い。その理由としては、次のことが考えられるだろう。第一には、精神と身体を一体と考えることは、ギリシア哲学の伝統的発想に由来している。第二には、ローマ社会では、破格の待遇を受けたごく一部のギリシア人医師を例外として、また、一部にはエジプト人医師がいたとはいえ、多くの医師たちはギリシア人あるいはギリシア系の人々であった。そして、かれらの多くは出自の卑しい人々であり、社会的地位ばかりでなく、収入も一般的に低かった点で共通していたし、時には同じ職業組合に所属していたとさえも考えられる。

ローマ・ヒューマニズムの担い手としてその形成に少なからず関与した教師と医師たちの多くは、古典ギリシアの場合とは全く異なり、出自の卑しい人々であり、多くは奴隷や被解放自由人であった。それに加えて、教師と医師とがしばしば一緒に考えられていたことは、史料にも登場する。例えばスエトニウスによれば、カエサルは「ローマに居住するすべての開業医と自由学芸の教師

とに、彼らがさらに快適に都で暮らせるように、また他の地の者たちがつとめてここに住居を求めるように、ローマ市民権を与えており」⁽⁶⁾、これは教師と医師とを特別扱いしているからであろう。また、「ある年のこと、大凶作のため窮状を救いがたくて、売りに出されていた若い奴隷と、教練士の抱える剣闘士とともに、すべての外国人　ただし医師と教師を除く　と家庭奴隷の一部を、都から追放してやっと穀物の価格が安定した時、…」⁽⁷⁾とも述べており、その際にも教師と医師は除外されており、こういった場合には、しばしば「教師と医師」とはひとまとめに扱われている。

このように教師と医師とがひとまとめに扱われていたことは、ギリシア哲学の伝統と考えれば理解しやすい発想であるが、ロ - マ法の上でもそのような認識があったと考えられる。ロ - マ帝国は組合国家だったとも言えるが、ローマ帝国において重要性をもつ職業人の組合参加に言及した史料にも、似たような表現がみられる。

1834年にペルガモンで発見された大理石の石片には、ギリシア語とラテン語の文章が刻まれていた。Herzogによると⁽⁸⁾、ギリシア語の碑文は74年にウェスパシアヌス帝が出した勅令であり、ラテン語の碑文は93-94年にドミティアヌス帝が出した布告（回答書）であった。ギリシア語の長い文章は、文法家、修辞学者、医師、体育場付きの医師に関するものである。その内容は教師と医師に与えられた特典に言及しており、つぎの3点に要約されるだろう⁽⁹⁾。

〔1〕教師や医師には、営舎の強制割り当てが課されることも、税金が課されることも決してないこと。

〔2〕教師や医師を不法に傷つけたり、拘禁した者には、罰金が課されること。

〔3〕教師と医師には、組合をつくることが許されること。

要するに、〔1〕では、当時、行軍途中の軍隊が町に立ち寄った際には、兵士たちのために宿泊所を提供する義務と納税の義務とがあったが、これらの特典が一般人とは違って教師と医師には免除されていることを意味している。〔2〕では、教師と医師は暴力によって脅かされたり、傷つけられたり、不当な扱いを受けたり、あるいは拘束されることから守られるべきであることを保障していることになる。〔3〕では、教師と医師が職業組合を形成する権利が認められている。周知のように、ロ - マ帝国においては、同職組合形成の権利

は大変重要なことであった。

例えば、医師が同職組合 (collegium) を形成していたことは、イタリアのトリノ出土の碑文⁽¹⁰⁾やベネヴェント出土の碑文⁽¹¹⁾にも確認することができる。しかしながら、興味深いのは現在のスイスの Avenicum 出土の碑文⁽¹²⁾である。この碑文を教師と医師が同じ職業組合に所属していたことを示唆したものと解釈する人々もいる。しかし、そのことを立証する史料が余りにも少ないことから、そのことに若干のためらいがないわけでもないが、この碑文を紹介した Walser は、この碑文は「教師と医師とが同じ扱いを受けている」つまり「同一の組合を形成している」ことを示したものとためらうことなく断言している⁽¹³⁾。

さらに Jackson も、これと同じ意見で、「医師と教師が同一の職業組合に所属していたことは、驚くことではない。なぜなら医療と教育とは伝統的にギリシア系の人々が従事した分野であり、彼らの関心事はしばしば重なりあっていたからである」⁽¹⁴⁾と述べており、その立場に立てば、教師と医師とは同じような集団であるとの社会的共通認識があったとみなしてよいだろう。

3 . 教師

古代ギリシア・ローマ教育史の研究分野は、古くはイエガーの『パイディア』に代表される分野であり、とりわけ H.-I. Marrou の先駆的研究⁽¹⁵⁾が広く知られている。そしてこの分野では、例えばプラトン、アリストテレス、キケロといった思想家たちの教育思想史的研究とか、ギリシア語修辞学・ラテン語修辞学 (弁論術) に関する研究の蓄積は、当然のことながら非常に豊かである。しかしながら、それに比べると、これまでのところ教育の実態に関する研究は決して豊かではない。

教育思想史の研究に比べると、前述のように、教育の実態の研究つまり学校・教師の実態、教育制度に関する研究は、法典史料の乏しさもあってやや遅れている。H.-I. Marrou の先駆的業績の後、Clarke⁽¹⁶⁾、Bonner⁽¹⁷⁾、Kaster⁽¹⁸⁾らの諸研究が続くが、教育制度や教師の実態についての研究不足は否定できない。しかし、その後 Christes の『古代口 - マの文法家と文献学者としての被解放自由人』⁽¹⁹⁾が登場し、1994 年には Sandrine Augusta-Boularot が口 - マ帝国下 (前 1 世紀 ~ 後 4 世紀) の文法家に関する碑文学的研究⁽²⁰⁾を発表し、医

師の研究に対して従来遅れがちだった教師の碑文学的研究に大きく寄与した。さらに近年口・マ教育に関する一連の著作を公表した Rosella Frasca の研究⁽²¹⁾は、教師や医師の職業教育を取り扱っている。

スエトニウスが *semi-graeci* と呼んでいる南イタリア生まれのギリシア人たちは、口・マのヘレニズム化の旗手でもあった。例えばリヴィウス・アンドロニクスやエンニウスらが奴隷あるいはそれに近い地位にあったにしても、それは彼らが南イタリアのギリシア都市の敗北の結果そういう境遇に落ちざるを得なかった人々だったからであった。彼らはギリシア都市で生まれ、完全にギリシア風の教育を受けて成長した。しかしながら、プルタルコスが伝えているところによれば⁽²²⁾、紀元前3世紀中ごろに、授業料を正式に課した最初の初等学校を開校した教師だったスプリウス・カルウィリウスは、被解放自由人であったが、以前には奴隷であったことは間違いないだろう。そして、その後数多く登場した初等学校教師たち (*ludi magister*) のほとんどが、このような人々だったと推測される。

こういった類の学校の過当競争に悩みながら、生徒確保に苦しんでいた教師たちに関する情報とは別に、スエトニウスの『文法家伝』は、思想家や文学者の著作が伝える情報とは違ったつぎのような情報を提供してくれる。

スエトニウスの記述によれば⁽²³⁾、Marcus Antonius Gniphos は、子供の時に捨てられ、彼を拾って育てた人によって教育された。Gaius Melissus も捨て子だった。ブルトウスやカッシウスの先生だった Staberius Eros は奴隷だったので、自分が奴隷市場に売りに出された時、自分の貯金でわが身を買わなければならなかった。Scribonius Aphrodisius は Orbilius の奴隷であり、生徒でもあった。そしてこの Lucius Orbilius Pupillus も孤児であったし、Quintus Remmius Palaemon も奴隷であったが、*paedagogus* として主人の息子と一緒に学校へ通っているうちに、教育を受けたらしい。このように当時世間に名を知られていた教師たちで捨て子だったと述べられている者が、養子になった時期をはじめ詳しい事情がわからない場合も含めて、全員が奴隷であったとは決め付けられないにしても、最下層出身者あるいは卑しい生まれの人々であったと思われる。我々にとって理解しにくいのは、このように捨て子だった人物あるいは奴隷だった人物がどうして著名な教師になれるまでの教育を受けることができたのかという疑問であろう。

さらに、ほとんどの文法家も被解放自由人だった。Saevius Nicanor あるいは Lucius Ateius Philologus あるいはスラの被解放自由人だった Cornelius Epicadus、ポンペイウスの被解放自由人だった Lenaecus、アッティクスの被解放自由人だった Quintus Caecilius Epirota、アウグストゥスの被解放自由人だった Gaius Julius Hyginus 等がいた。こういった人々は、解放以前には奴隷であったと考えてよいだろう。

ところで、奴隷教師とははっきりと認定できなくても、ごく一部の人々を例外として、一般的に多くの教師たちの出自は卑しかったし、経済的にも貧しかったようである。つまり、授業料収入だけでは生活できないために、その不足を補うために他の仕事を引き受けなければならなかった教師たちも少なくなかったようである。例えば、Marcus Pompilius Andronicus は余りにも貧しかったので、自著を売らなければならなかった。Pulbius Valerius Cato は長生きはしたが、生涯極度の貧困生活を過ごした。前述の Gaius Julius Hyginus も、貧困のなかで世を去っている。

彼らが奴隷であろうと被解放自由人であろうとも、彼らが教師になるまでの経歴を見てみると、とても体制内で恵まれた生活が約束されているような人々であったとは思えない。先にも述べたように、Orbilius も孤児であったが、その後政務官の従者となり、マケドニアに従軍したり、騎兵士官となった後に、この職業についている。Lucius Crassicus は、芝居作者の助手として舞台関係の仕事をしていた。Marcus Pomponius Marcellus は、以前は拳闘家だった。Marcus Valerius Probus は、長いこと百人隊長に任命されるのを待っていたが、とうとう待ちくたびれて勉学に専念した。こういった教師になる以前の彼らの職業や教師になる過程から受ける印象では、彼らが惨めな境遇だったとは言えなくとも、例えば、ボクサーが教師になっても少しもおかしくないが、教師になるためにはボクサーになる必要があるという理屈はないだろう。

要するに、スエトニウスの記述から判断すると、彼らの多くはその時その時に選択可能な仕事に就いたにすぎないらしいという印象を受ける。彼らは結果として教師になったにすぎないのであろう。つまり、出自の卑しい人々、とりわけ奴隷出身の人々にとっては、職業選択の自由は非常に限られていたのであろう。

4. 医師

プリニウスが「ローマ人は医学の仕事に従事しなかった」⁽²⁴⁾と述べているように、例えば、ローマ社会の医師の多くは、生来自由人（ingenui）のローマ人ではなかった。ローマ帝国の西部地域全般では、とりわけ都市ローマでは、医師たちの多くはギリシア人がギリシア系の人々であった。

医師の職業はおそらくローマ時代の碑文に登場するあらゆる職業のうちで最も代表的なものであるが、その職業に従事している人々の間には、経済力の面でも社会的地位の面でも大きな格差があった。我々は当時の墓碑の表面に医師の肖像とか医療道具とかが刻まれている例をしばしば見ることができるし、それによってその墓碑が医師のものであることを推測できる。文学史料、碑文史料などから知る限り、ローマ世界には、さまざまなタイプの、さまざまな階層の、さまざまな能力の医師たちが活躍していたことが知られている。

民間では、医師になろうとしたローマ市民はごく少なかったけれども、ローマ帝国の軍隊は世界で最初に軍医制度を採用した軍隊であったことが注目される。軍医制度とは軍隊に単に医師が同行していただけではなく、軍医とは軍籍のある医師であるということである。ローマ帝国では、ローマ正規軍団（Legio）ばかりでなく、海軍も補助軍も含めた全軍隊に軍医が配属されていた⁽²⁵⁾。

広大なローマ帝国全域に展開したローマ軍全体に配属されていた軍医たちの総人数は、正確にはわからないものの、かなりの人数になるものと推測される。それだけの人数の軍医たちをどうしてローマ軍が確保できたのかには少なからず疑問が残るだろう。この問題ばかりでなく、われわれはローマの軍隊を一般社会から余りにも孤立した組織と考えすぎる危険にも慎重でなければならぬだろう。民間には生来自由人の医師たちが少なかったにもかかわらず、ローマ市民権所有者で編成される全正規軍団（Legio）に複数の軍医が配属されていたことは、ローマ人の医師観およびローマ人の医学観が大きく影響していたはずである。

ところで、この際、軍隊付きの医師あるいは軍医を別にとすると、直接軍隊とは関係のない医師たちのうちの第一の集団は、ローマ皇帝の侍医たち、あるいは富裕家族に抱えられた家庭医たちである。彼らはその家の家族の求めに応じて医療奉仕をしていた。

第二集団は独立した開業医たちであり、彼らは多くの患者を治療していた。彼らのなかで学識のある医師たちは、病気を治療するとともに、しばしば富裕者たちや社会的地位の高い人々と哲学を論じあっていた。彼らの一部はすぐれた医学哲学者でもあった。他方では、道路沿いの診察室や路上で簡単な治療をしたり、インチキめいた医療行為をする質の悪い、貧しい自称医師たちもいた。つまり、彼らのすべてが質の悪い医師ばかりだったわけではないが、医師のライセンスさえも必要でなかったローマ社会では、水準の低い医師も少なくなかったと推測される。

第三集団は自治体に雇用され、自治体から報酬を受け取る公共医師たちであった。この最後のタイプの医師たちの場合には、医師たちは自治体から受け取る報酬の代償として、治療を必要とするすべての人々に治療を施さねばならなかったものと推測されるが、それなりに評価を受けた医師たちが多かったのかもしれない。

キケロは『義務論』の中で、「高度な知識を必要とするか、あるいは少なからず社会に有益な職業である医師や建築家や自由学芸の教師は、それらがふさわしい人々には適しており、小売商や職工のような卑しい仕事よりは好ましいが、農業ほど自由人にふさわしい仕事はない」⁽²⁶⁾、と述べており、医師は俗悪ではないけれども、自由人に真にふさわしい職業ではないと主張している。前述のとおりプリニウスも「ローマ人はギリシアの学芸である医学には従事しなかった」と述べているように、ローマ市民はすすんで医師になろうとはしなかった。

キケロの主張は、ローマの中・上層市民たちの発想、あるいは別な表現をすれば、ローマの体制側の人々の発想を代表しているとも考えられる思想である。ローマ社会では、生来自由人(ingenui)が教師や医師になってはいけないという法律があったわけではない。一般的に生来自由人のローマ市民は医師になろうとはしなかったという現実があったというだけである。軍隊内の軍医や整備された軍事病院の存在を考えるならば、医療に従事するローマ人の存在が推測されるので、事情によってはローマ人が医療に従事することを嫌っていたとばかりも考えられない。

その理由はどうあれ、結果として、ローマ法学者たちが分類しているように、生来自由人(ingenui)の医師たちはごく少人数で、有名なギリシア人医師た

ちの多くは外人 (peregrini) だった。そして、多くの医師たちは被解放自由人 (liberti) か奴隷 (servi) たちだった⁽²⁷⁾。人数的には、ローマ社会で活躍していた医師たちの多くは、出自の卑しい、社会的地位も収入も低い人々であった。

しかしながら、一部のギリシア人医師たちはローマ市民権をもっていたり、高い社会的評価を得ていた。著名な医師だけを見ても、例えばマルクス・アウレリウス皇帝の侍医だったガレノスは、古代医学界の権威であったし、クラウディウス帝の宮廷医だった Gaius Stertinus Xenophon は、ローマ市民権を獲得していた。ピチュニアの Asclepiades は、侍医として歴史に登場してくるギリシア人医師たちを別にすれば、ローマで活躍したギリシア人医師たちのうちで最も成功し、最も人気を獲得した医師であった⁽²⁸⁾。

ローマ社会で最も著名な医師でもあったこのアスクレピアデスは、ヘレニズム世界で有名な医学校の出身者であったとは伝えられていないし、当時の主要な医学派の代表的医学者でもなかったし、ローマ訪問以前に高名な医師としてヘレニズム世界で広く知られていた人物でもなかった。しかも、極めて想像しにくいことであるが、彼はローマにやってきた時、最初は修辞学者としてデビューすることを願っていたのに、その後の社会的成功のことを考慮して医師に転向したのだと伝えられている。たとえ彼が医学の心得があったにしても、「修辞学者から医師への転向」などは、誇り高いギリシア人医師としては考えにくい行動である。

要するに、アスクレピアデスは医学的能力が高く評価された名医として最初から迎えられたのではなく、むしろローマにやってきた時には無名の人物であった可能性がある。「修辞学者から医師への転向」などという誇り高きギリシア人医師としては考えにくい行動をとったアスクレピアデスがローマ世界で名声を獲得できたことこそが、ローマ人の医学観・医師観を最もよく示しているだろう。つまり、アスクレピアデスの成功の背後には、むしろ彼の医師としての非専門性があったと言えるであろう。ここにはギリシア人の医学観・医師観とローマ人の医学観・医師観との大きな相違がある。

5 . 奴隷医師たち

ローマ世界の大きな特徴は、教師や医師たちの多くが奴隷であったことであろう。当時の教師や医師たちのうち、奴隷の人数がどの程度の比率を占めてい

たかを正確に推測することは困難である。例えば、その被解放自由人が奴隷解放された人物の何代目の被解放自由人であるかを決定することが難しい場合もあるだろう。しかし、決して少なくない人々が奴隷あるいは元奴隷たちであったことは明らかである。ここで比較的史料から認識しやすい奴隷医師のケースを見てみたい。

やや古い情報ではあるが、Duffの有名な分析によると、ラテン碑文集(CIL)のVI 9562-9617には50人の医師が登場するが、彼らのうち2人だけが確実にperegriniで、12人は被解放自由人(liberti)で、13人は名前が1つだけなので奴隷か被解放自由人であり、残りの方々のうち半数は、おそらく被解放自由人の子孫であろう。そして、ローマの医師たちのうち約25パーセントの人々は、属州出身者か、彼らの子孫であったらうと、Duffは推測している⁽²⁹⁾。しかし、この推測はかなり信頼できるものの、この数字はあくまで1例であって、パーセントはあくまで推測でしかない。もちろん奴隷の医師が幾人だったかは推測の域を出ないが、元奴隷を含めると、かなりの数の奴隷医師がいたことは否定できないだろう。

また、碑文学者たちも、ローマ世界では、多くの医師たちは奴隷(servi)および被解放自由人(liberti)あるいは彼らの子孫たちであり、しばしば外人(peregrini)であって、生来自由人(ingenui)の医師はごく稀であったと推測している⁽³⁰⁾。被解放自由人の多くは、奴隷時代に従事していた仕事を解放後の職業にしていた場合が多かったことなどを考えると、被解放自由人の医師たちの多くは、奴隷時代にすでに医師としての訓練を受けたものと推測できる。

例えば、Forbesによると⁽³¹⁾、ユヴェナーリスが列挙した9つの職業、つまり文法家、修辞学者、測量士、画家、マッサージ師、鳥占師、綱渡師、医師、魔術師(Grammaticus, Rhetor, Geometres, Pictor, Aliptes, Augur, Schenobates, Medicus, Magus)のうち奴隷が従事したことがないのは、Rhetor, Geometres, Augur, Magusだけであるので、9つのうち5つの職業には、一般的にであれ稀にであれ、奴隷が従事していたことが知られていることになる。つまり、奴隷たちは教師や医師以外の職業でも多数の人々が活躍していたことになる。いずれにしろ、碑文史料から見ても、ローマ社会にはかなりの数の奴隷医師たちが活躍していたことは間違いない。

ローマ世界で活躍した著名な医師たちの多くは、peregriniであったと思わ

れるが、文学史料に登場するよく知られている奴隷医師に注目すると、皇帝アウグストゥスはアスクレピアデスの弟子として知られる著名な医師であるアントニウス・ムーサを侍医として抱えていたにもかかわらず、孫娘のアグリッピナに宛てた書簡の中で、別な奴隷医師たち (servi medici) について言及している⁽³²⁾。このことから彼がムーサとは別に、他の奴隷医師たちを所有していたことが分かる。

また皇帝に限らず、当時の有力政治家たちが自分の側近の中に侍医を抱えていたことはよく知られている。さらに一般的に富裕なローマ人の家庭にはしばしば奴隷医師がいて、主人や主人の家族の主治医として働いていた。そして、主人が遠方に出掛ける際には、彼も主人に同行していた。例えば、カエサルが雄弁家アポロニウス・モーローの下で弁論術を学ぶためにロドス島に向かう途中で、海賊に捕らえられて40日近くも監禁された際に、カエサルに付き添っていて一緒に監禁されたのは、1人の医師と2人の従者だけであった⁽³³⁾。こういった医師たちの全員が奴隷であったとは決めかねるにしても、奴隷医師たちの存在はごくありふれた状態だったと推測できるだろう。

ところで、人数を推測することは余りにも困難ではあるが、古代ローマ世界には *medica* と呼ばれる女医や助産婦 (*obstetrix*) たちがいたことは明らかであり⁽³⁴⁾、女医と助産婦のギリシア語の合成語からきている *iatromea* という語も使われていた。女医の人数は男性医師よりはるかに少なかったと推測される。碑文で見ると、女医の多くはギリシア人がギリシア名を名乗っており、特定の階層の出身者に限定されず、さまざまな階層の人々がいたことが知られている。その点では人数には大きな差があったと推測されるものの、男性医師の場合と余り相違はなかったように思われる。つまり、生来自由人 (*ingenui*) の女医もいたが、被解放自由人や奴隷の女医もいたことは間違いない。そして、同様に、被解放自由人や奴隷の助産婦も少なくなかったであろう。例えば、奴隷の女医は富裕な家庭に抱えられていたと推測される⁽³⁵⁾。

6 . 奴隷の職業教育

これまでに幾度も述べてきたように、ローマ・ヒューマニズムの担い手でもあった多くの教師たちや医師たちがローマ世界に活躍していて、彼らの多くは出自の卑しい人々であった。しかも、彼らのうち決して少なくない人々が奴隷

であった。むしろ奴隷教師や奴隷医師の存在を無視してはローマの教育や医療を考えることができないほどであった。

ローマ世界で活躍していた奴隷教師や奴隷医師たちの能力は、さまざまであった。ローマ社会では、その仕事に就くために必要なライセンスというものがないこともあり、ずいぶんいいかげんな自称教師・自称医師も少なくなかったと思われる。しかし、どんなに能力差が大きかったにしろ、それでも教師にしろ医師にしろ、それなりの職業教育を受けていたはずである。それでは、何故彼らは金銭を所有しない奴隷でありながら、そのような教育を受ける事ができたのであろうか。勿論、一部の奴隷たちは偶然幸運な環境に恵まれて教育を受けることができたのであろうが、全ての奴隷たちがそういう幸運に恵まれていたわけではないだろう。われわれはそのようなケースとは別に、奴隷教師や奴隷医師を養成する道が準備されていた可能性を推測しなければならないだろう。

先に言及したペルガモン出土の碑文にラテン語で刻まれたドミティアヌス帝の布告は、アウルス・リキニウス・ムキアヌスとガウィウス・プリスクスに宛てた回答書であったが、ローマの奴隷教育の背後事情をうかがわせる興味深い内容を含んでいる。

「医師と教師の学芸は一定数の生来自由人（*ingenui*）の青年に教えられるべきにもかかわらず、人間性（*humanitas*）からではなく、教授することによる収入増加が目的で、（職業訓練が認められている）多くの寝室系の奴隷たちに（*cubicularii servis*）大変恥知らずにも金で売り渡されている。余は、これらの行為をする医師と教師たちの貪欲さを厳しく抑制することが必要であると判断した。それ故、奴隷を教授することから報酬を受け取る人物は誰であれ、ちょうどあたかもその人物が外国の都市でその職業に従事しているかのように、余の父が許可した（免税の）「特典」*Immunitas* は剥奪されるべきである。」⁽³⁶⁾

この碑文で問題なのは、医師を指す *medicus* という語がこの石片に残っておらず、Herzog によって補われたという点である。しかしながら、文法家と修辞学者とは最初の頃には区別されていなかったとスエトニウスが述べていること⁽³⁷⁾を根拠に、Herzog は文法家と修辞学者（*grammatici et rhetores*）とは *praeceptores* の一語でくくられていた、と主張した⁽³⁸⁾。

このラテン語で書かれたドミティアヌス帝の布告は、あきらかに前半のギリシア語で書かれたウェスパシアヌス帝の勅令を前提にしている。ここで言及されているドミティアヌス帝の父であり、特権を許可した人物とは、勅令を出した皇帝ウェスパシアヌスのことである。この布告が目されるのは、奴隷教師や奴隷医師の養成に関する内容を含んでいるからであるが、その内容を整理すると、以下のようになる。

(1) 医師と教師の学芸は、自由人 (ingenui) の青年にのみ教育されるべきであること。

(2) (それなのに) その教育の仕事が、収入目的で奴隷の教育を引き受ける職業訓練係の手に売り渡されている。

(3) これらの行為を恥知らずにも請け負う医師と教師たちの貪欲さは、厳しく抑制されるべきであること。

(4) それ故、収入目的に奴隷の職業訓練を引き受ける医師や教師からは、以前にウェスパシアヌス帝が与えた特典を剥奪すべきであること。

さらに、この回答書はつぎのことを前提にしているであろう。つまり、医学や自由学芸の教育は、本来は自由人だけを対象にすべきものであることである。しかし、この発想はギリシア以来の伝統的思想とは合致するものの、ローマ社会の実態とはまるで違っていた。とすれば、この碑文では本来の精神を述べたものであり、ローマ人もまた建て前上はギリシア以来の伝統的精神を肯定していたことになる。

しかし、実態は、多くの奴隷教師や奴隷医師たちがローマ社会には活躍していた。それゆえに、奴隷教師や奴隷医師はなぜ登場できたのか、が問題になる。前述のように、教師も医師もどちらもそれなりの教育を受ける必要があったと推測できるからである。とすれば、彼らはどのようにして教育を受けることができたのか、が問題となる。奴隷には授業料を支払うことは不可能ではあるが、奴隷側の動機を想像する事は可能であろう。しかし、奴隷が教育を受けることを可能にするためには、本人の学習意欲なり適性なども重要ではあるが、何よりもそれを可能にしたのは、奴隷所有者側の動機であろう。奴隷教育を欠いては、奴隷医師や奴隷教師の養成は不可能である。

それゆえ、奴隷に職業教育を受けさせたローマ人側の動機が問題となる。この碑文は、奴隷に職業教育をすることが可能であり、そして、恥知らずにも収

入目的で奴隷教育を引き受ける人々が実在したということの意味している。この際、直接奴隷教育に従事していたのが寝室付きの奴隷であるとも解釈されているが、この碑文の中で皇帝が対象にしている人物が誰であれ、問題は、ここで述べられている奴隷、あるいは彼らにそうさせている人々のことである。つまり、奴隷に経済的目的で職業教育を受ける人々がいたことは確かであるが、次に問題となるのは、どの奴隷がそれだけの教育を受けるべきかを決定し、教育費用を負担してまでも奴隷教育を依頼した奴隷所有者がいたということになるだろう。

奴隷たちの職業教育が無目的に行われたはずはないとすれば、奴隷に職業教育を受けた側の動機が問題である。そして、恥知らずな不心得者はいつの時代にも、どの社会にもいるものであるが、思想家が著作で不徳を非難するのではなく、わざわざ皇帝が布告を出して碑文に刻ませて公式に非難するということは、そのような事態をもはや放任しておけない、目に余る行為であり、深刻な状況であると権力者の目には映ったのであろう。

ところで、ここで非難されている奴隷教育を引き受けている教師や医師たちはごく少数の例外の人々にすぎなかったとは考えにくいだろう。すべてが彼らが養成した人々ではなかったにしろ、ローマ社会にいた奴隷教師や奴隷医師の人数は決して少なくはなかったからである。我々は奴隷教育の禁止とも解釈できるこの布告の意味を、そのような事態を引き起こしたローマ社会の状況と関係づけて理解しなければならないであろう。

ローマ社会では奴隷が再生産されていたとも言われる。ローマ社会内部で法的記録に明確に現われない関係の両親から生まれた、生れながらの奴隷とか、捨て子とかによる乳児奴隷の数も少なくなかったように推測される。問題は、そのように奴隷の乳児なり幼児を養育し、教育を受けることが、奴隷所有者にとっても経済的に有利であるとの判断があったということになるだろう。

奴隷を教育する奴隷所有者側の動機を考える場合に、すぐ念頭に浮かぶのは、読み書きができる奴隷に関する大カトーの見解である。プルタルコスによれば⁽³⁹⁾、大カトーは、子供の奴隷を養育し、自分が抱える教育のある奴隷を教師にして教えさせた後で、高値で売却することは利益をもたらすと友人にも勧め、且つ自分でも実践していたようである。現実に大カトーはキロンという教育経験豊富な奴隷を所有していたので、このことは実践可能なことであったと容易

に想像できる。この大カトーの発言がどの程度一般的に実践されたかは明確ではないが、読み書きのできる奴隷が意図的に養成された可能性を示唆しているだろう。

職業教育を受けた奴隷は、すでに読み書きはできたと考えられる。子供の奴隷に読み書きを教育し、その後教師や医師にするための職業教育を受けたケースも勿論あったであろうが、もっと一般的に子供の奴隷を教育する場合は一部にはあったと推測できる。その教育内容や普及率については、ローマ人の識字率の問題とも関わり、研究者の間でも微妙な違いがある。奴隷たちも学校に通った習慣があったという Forbes の推測⁽⁴⁰⁾も、そもそも学校たるものの定義が問題であるので、完全にあり得ない話ではないが、それよりもはるかに可能性が高いのは、教師たちが富裕家族の大きな家の内部にあった学習室 (paedagogia) で働いていたという Mohler の意見⁽⁴¹⁾の方であろう。しかし、このような paedagogia は、一部の家に限られていたろうと推測できるだろう。

いずれにしろ、読み書きもできない無学な奴隷よりも、多少でも教育のある奴隷の方が、こなせる仕事の選択肢も多く、役に立つし、またそういう読み書きのできる奴隷を求める人が多ければ、それだけ奴隷市場で高値で売却できて有利であるという理由があったろうと推測される。要するに、教育のある奴隷と教育のない奴隷とでは市場価値に差があるとすれば、奴隷に教育を受けさせることは、奴隷自身のためでも、自分が使用するためだけでなく、それ自体が奴隷所有者の経済的目的に適っている一面があったのであろう。前述の大カトーの発言がどの程度一般的に実践されたかは明確ではないものの、読み書きのできる奴隷が意図的に養成された可能性を示唆しているであろう。

7. ローマ人体制側の発想

奴隷あるいは出自の卑しい教師たちや医師たちを生み出したローマの社会的事情が明らかとなり、たとえ下層階級出身の教師や医師が誕生する可能性が説明されたにしても、問題は解決しない。根本的な問題が残るからである。つまり、なぜローマ人は自ら教師や医師になろうとしなかったのかという大きな疑問は消えないだろう。ローマ人が教師や医師になるだけの能力を欠いていたとは思えない。極端に言えば、自由学芸を学び、病気の治療を受けているのがローマ市民であるならば、彼らのなかから教育や医療に従事する人々が出現し

なかった理由が問題であろう。

つまり教師や医師になろうとしなかったのは、ローマの中層・上層市民の発想であり、ローマの体制側の体質であったように思われる。下層階級出身の教師や医師を活用しておきながら、それらの仕事に就く人々に対して差別感を抱いていたローマ人の考え方にも大きな問題があったように思われる。最後に、ローマ人特有の思考傾向つまりローマの体制側の人々の発想と思われるものを列挙してみたい。

1) 第一に、大カトーの『農業論』で語られているカトーの医学観の発想である。当時の有力な政治家であったカトーは、文学的にも多作家であり、ローマの百科全書的科學書のジャンルの創始者でもあった。カトーは医学の専門家でもなければ、農業の専門家でもない。カトーの医学知識は、当時の農場主であった家長が知っておくべき民間療法に類似のものであり、当時の獣医学に類似のものであったと理解できる。

そして、このことは一人カトーだけに限られた問題ではなく、ローマの百科全書的科學書の著作家たち全員に見られるローマ人の科學観・文學観に現われている。医師でも医学者でもなかったケルススがローマの代表的醫學書である『醫學書』を著し、建築家でもなかったヴィトリヴィウスが『建築論』を著すという傾向にみられるように、そこには徹底したスペシャリスト拒否の傾向があるだろう。つまり、専門家であるよりも、非専門家の道を選ぶ体質である。つまり、ローマの百科全書的科學書の著述家たちはその分野の豊富な知識を持ってはいたが、科學なり醫學の専門家であろうとはしていない。まさにこのことが、彼らが教師や医師になろうとしなかったことに結びついているように思われる。

2) ローマの中間・上層市民の発想を代表していると思われるのが、キケロの『義務論』の見解である。キケロの職業観・労働観は、結果的にプリニウスの発言とも一致しており、ローマ市民が教育や医療の職業に就きたがらなかった理由になっているように思われる。ローマ法では教師や医師の行なう精神労働も *locatio conducio* に含まれることになり、授業料や診療費として金銭を受け取る行為への差別意識は打ち消せなかったろう。つまり、自由学芸に従事することや医療が問題なのではなく、教授料を受け取る教師や治療費を請求する医師を職業とすることへの抵抗感があったのだろう。まさに金銭のために提供

する精神労働に対する蔑視が、教師や医師になろうという動機には結びつかなかったのではないだろうか。

3) つぎに、一方では、ギリシア医学はローマ医学に継承されているにもかかわらず、他方では、ギリシア人の医学観・医師観とローマ人の医学観・医師観との間に大きな相違があったことである。ギリシアに奴隷医師がいなかったという見解も、ギリシア人の医師観に関係がある。病気の経過を考える予後を重視し、医学哲学に傾倒するギリシアの医師と、臨床を重視するローマの医師との差は大きく、アスクレピアデスの社会的成功にも象徴されている。アスクレピアデスのように「修辞学から医学に転向する」というギリシア人医師らしからぬ人物でも、ローマでは成功できることを示していた。医学をめぐるローマ的環境こそが、アルカガトスのローマへの受容を拒否し、アスクレピアデスの成功を可能にした風土であったろう。アスクレピアデスの成功の事情は、ローマ社会へのギリシア人医師の浸透の事情を暗示してもいるだろう。

4) 最後に最も本質的なことであるが、ローマ・ヒューマニズムの中核となる教養の問題である。Varro から Martianus Capella までの間に、自由学芸から建築と医学が脱落したことの意味である。ローマ人も「自由学芸と医学は自由人を対象にすべきである」というギリシア古典期以来の精神を否定はしていない。たとえば、Quintilianus も建前上はプラトンの理想を尊重していながら、彼の数学軽視はあきらかであり、一般的にローマ人の数学力の低下を連想させる⁽⁴²⁾。

以上のことは、どれが原因であり、どれが結果であるかははっきりしないけれども、ローマ社会なりローマ文化の特質になっている。つまり、ローマ・ヒューマニズムの担い手たる教師や医師たちと、かれらに奉仕を求める自由市民たちとの間には、一方では社会的地位の大きな格差がありながら、他方ではローマ人側の意識にはそれほどその格差を問題視せず、ローマ市民からそういう人材を生み出そうとはしなかった状況は、ローマ文化の特質と深く関連があるのではないだろうか。

注

(1) August Buck, *Humanismus: seine europäische Entwicklung in Dokumenten und Darstellungen* (München 1987).

- (2) Below, K. H., *Der Arzt im römischen Recht* (München 1953) 23f.
- (3) 拙稿「古典古代の奴隷医師について」『科学史研究 141』(1982), 49-56.
- (4) 拙稿「ローマ科学と古代における Quadrivium の生成 I」『科学史研究 128』(1979) 198-206、
「ローマ科学と古代における生成 II」『科学史研究 132』(1979)215-221 参照。
- (5) 拙稿「“自由学科”概念の起源について」『史観 100』105-115 参照、Bruce A. Kimball,
Orators and Philosophers: A history of the Idea of Liberal Education (New York 1986).
- (6) Suet. *Caes.*42.1.
- (7) Suet. *Aug.*42.3.
- (8) Herzog, R., *Urkunden zur Hochschulpolitik der römischen Kaiser* (Berlin 1935) 979.
- (9) cf. Riccobono, S., *Fontes Iuris Romani Antejuristinijani* (Firenze 1941) 13-18; Below,
K. H., 23f.
- (10) CIL., V.6970.
- (11) CIL., IX, 1618.
- (12) CIL., XIII.5079(7786).
- (13) Walser, G., *Römische Inschriften in der Schweiz I. Teil: Westschhweiz* (Bern 1979),
162.
- (14) Jackson, R., *Doctor and Diseases in the Roman Empire* (London 1988), 96ff.
- (15) Marrou, H. I., *Histoire de l'éducation dans l'antiquité* (Paris 1948).
- (16) Clarke, M. L., *Higher Education in Ancient World* (London 1971).
- (17) Bonner, R. A., *Education in Ancient Rome* (Berkeley 1977).
- (18) Kaster, R.A., *Guardians of Language: The Grammarian and Society in Late
Antiquity* (Berkeley 1988).
- (19) Christes, J., *Sklaven und Freigelassene als Grammatiker und Philologen im antiken
Rom* (Wiesbaden 9 1979).
- (20) Augusta-Boularot, S., “Les references epigraphiques aux grammatici et
gram-matiikoi de l'empire romain”, *MEFRA*. 106.2 (1994), 653-746.
- (21) Frasca, R., *Educazione e formazione a Roma*, 384-546.
- (22) Plut., *Quaest. Rom.*59. 拙稿「ローマ共和政後期における教師の報酬」『早稲田大学文学
研究科紀要 32』(1987)187-204 参照。
- (23) Suet. *Gramm.*1-20;23. 拙稿「ローマ教育とギリシア人教師」『史観 80』(1969) 73-86、
拙稿「古代ローマの奴隷教育・再考」『早稲田大学文学研究科紀要 44』(1999) 3-19 参照。
- (24) Plin. *H.N.*29.17. 拙稿「ローマ社会の医師」『早稲田大学文学研究科紀要 38』(1993)
171-185 参照。
- (25) 拙稿「軍団の医師とローマ人の医師観」『史観 107』(1982) 194-211. 拙稿「共和政期ロ
ーマ軍内の医療従事者」『日本医史学雑誌 30-1』(1984) 1-13. 拙稿「ローマの軍隊と軍医
制度」『軍事史学 37-2』(2001) 30-50. 参照。
- (26) Cicero, *Off.* I.150f.

- (27) 拙稿「古典古代の奴隷医師について」『科学史研究 141』(1982), 49-56、拙稿「ローマ帝政初期の奴隷教育と奴隷医師」『史観 111』(1984) 14-35、拙稿「古代ローマの奴隷教育・再考」『早稲田大学文学研究科紀要 44』(1999) 3-19.参照。
- (28) 拙稿「ギリシア人医師アスクレピアデス」『史観 104』(1981) 57-69.参照。
- (29) Duff, A. M., *Freedmen in the early Roman Empire* (Oxford 1928), 120. 拙稿「古典古代の奴隷医師について」『科学史研究 141』(1982) 49-55 参照。
- (30) Gummerus, H., *Der Arztstand im römischen Reiche nach den Inschriften* (Helsingfors 1932).
- (31) Forbes, C. A., "The Education and Training of Slaves in Antiquity", *T.A.P.A.*86 (1955), 326ff.
- (32) Suet.*Calig.*8.4.
- (33) Suet.*Caes.*4.
- (34) 拙稿「ローマの女医・助産婦」『早稲田大学文学研究科紀要 41』(1996) 43-55.参照。
- (35) 拙稿「ローマの医師と碑文」『早稲田大学文学研究科紀要 45』(2000) 33-38 参照。
- (36) Herzog, 979. 拙稿「古代ローマの奴隷教育」3-19.
- (37) Suet.*Gramm.*4
- (38) Herzog, 979.
- (39) Plut., *Cat. Mai.*20-21.
- (40) Forbes, 328f.
- (41) Mohler, S. L., "Slave Education in the Roman Empire", *T.A.P.A.*71 (1940), 262-280.
- (42) 「ローマ科学と古代における Quadrivium の生成 II」『科学史研究 132』(1979) 215-221 参照。

(追記) 本稿は、科学研究費研究報告 基盤研究 B「ヨーロッパ史における分化と統合の契機」(1998-2001 研究代表者：前田 徹)の内容と一部分重複する部分がある。